

2000 年度 海外学会派遣プログラム参加報告

- 周海燕「アメリカの旅—心のアルバムの一頁」 -----42
- 葉文昌「イギリスでの太陽電池デバイス関連学会
—世界の学産業界と交流できる年に一度のお祭り」 -----43
- 何祖源「アメリカ赴任記」 -----44
- マリア ハケウ モウラ コインブラ「オーストラリアのタウンズビルで開催された
第7回遺伝子水産学会参加報告」 -----45
- 胡潔「日本研究はもっと国際的な視野が必要である」 -----46
- 高玲娜「国際比較研究方法とグローバル研究方法を考える
—アメリカの旅により—」 -----47
- 金雄熙「IT 革命と「フュージョン」」 -----48
- 李恩民「もう一つの歴史認識」 -----49

アメリカの旅

心のアルバムの一頁

しゅう かいえん
周 海燕

東京医科歯科大学 博士(医学)

東海大学医学部

1999年度奨学生

2000年は私にとって色々の意味でとても重要な年でした。特に「渥美国際交流財団の海外学習派遣プログラム」で憧れの学会米国消化器病週間(Digestive Disease Week)に発表出席したことは大変収穫の大きい旅でした。学会は黄金の季節と言える5月にSan Diegoで開催されましたが、せっかくの機会でしたのでSan FranciscoとLos Angelesにも寄ってきました。ここでこの初めてのアメリカの旅で感じたことを報告させていただきたいと思います。

往路はSan Francisco経由で余裕を取ってSan Franciscoで一泊二日の観光をしてから学会開催地のSan Diegoへ向かいました。10時間を超える飛行機の旅はそれで三度目でしたが、やっぱりはじめてのアメリカでしたので興奮で胸一杯でした。時差もさほど感じませんでした。学会はさすが消化器領域では世界一と言われているだけのことがあって、とても大規模でした。今回の学会参加がきっかけでこの学会の海外会員にもなれました。本当によかったなと思いました。最初の二日は自分の発表がありませんでしたので一生懸命に各国の先生達の炎症性腸疾患に関する研究発表を聴きました。いよいよ自分の番になり、“The Effect of Berberine and Geniposide on Experimental Colitis in Rats in vivo”の演題でポスター発表しました。偶然、となりの発表者はアメリカ在住の中国人研究者で、とても積極的で、自ら“Can I help you”から始まって一生懸命に自分の研究をみなさんに紹介していました。それを見て、ただ質問を待っていた自分を恥ずかしく思い、積極的に頑張って見ました。最後は“Good work”と言われ、とても嬉しかったです。やっぱり何事にしても自ら自主性を持って積極的に発信しなければ人に旨く伝わらないなというこ

とを異国で同胞に教わりました。



1週間の学会はあっという間に終わりました。ふと、出発前に“メキシコが近いから行って来たら良いですよ、とても面白いから”と友人に言われたことを思い出しました。後、半日ありましたからタクシーに乗って国境まで行って、向こうのメキシコへ歩いて入りました。最初はただただその一線に隔てられた両側の格差に驚きましたが、無目的にぶらぶら歩いているうちに不思議にその国に秘められている生命力に強く惹かれていました。再びアメリカ合衆国に戻ってきたのはその日の夕方でした。いつか絶対にゆっくりとメキシコへ旅をしたいと思いました。

復路はLos Angeles経由でした。Los AngelesとSanta Monicaで一泊ずつをしました。San FranciscoもLos Angelesも高層ビルしか印象に残りませんでしたが、Santa Monicaの海岸で、海風に吹かれ、海鳥を眺めながら、散歩したり、ロブスターをご馳走になったりして気持ちのゆとりを感じさせられました。一方、ホームレスの多さにもびっくりさせられました。

Los Angelesから成田空港へ向かう飛行機に乗った途端にお茶漬を食べたくなった自分に気がついて、私にとって日本は本当に第二の故郷なんだなと思いました。今回の旅は短かったですが、自分の

研究を世界規模の学会で紹介できたことをとても誇りに思っています。普段、アメリカの情報が絶えず入ってくるので、あまり初めての旅の感じはしませんでした。やはり表面しか見られなかったんじゃないかなと思います。何れにしても、この旅で得られたものを、心のアルバムの中で大事な一頁として

納めておきたいと思います。いつかきっと思い出して記憶の中で光ってくると信じています。

これから、地球人として色々な所へ旅をしたいし、色々な人々と交流をしたいと思います。そういった経験こそ人生を多彩にしてくれると思っているからです。

世界の学産業界と交流できる年に一度のお祭り

よう ぶんしょう
葉 文昌

東京工業大学 博士(電子物理工学)
工業技術研究院材料研究所研究員 (在台湾)

1999年度奨学生

5月1日～5日にイギリス Glasgow で開催される **16th European Photovoltaic Solar Energy Conference and Exhibition(PVSEC)** 学会に参加しました。発表者は **1000** 人程度で、太陽電池デバイス関連学会の中では北米の **IEEE**、アジアの **PVSC** と並んで世界3大会のひとつに数えられます。この学会で、ビジネスショーが同時に開催されるため、この学会に参加することで、その地域での太陽電池研究とビジネスの盛り上がりを知ることができます。この行事は太陽電池に携わるものにとって世界の学産業界と交流できる年に一度のお祭りであるのです。

今回、ついでにサンフランシスコで開催される **MRS** 学会に **5** 日間参加し、その後ロンドンへと向かいました。SF との時差は約8時間、せっかく米時間への時差調整を完成させたと言うのに、再調整です。一日休眠して翌日 **9** 時にはスコットランド行きの縦断鉄道に乗り込みました。旅はやはり電車が一番現地の風景を見渡すことができます。ロンドンから少しでも出れば、周囲は延々と羊牧場が続きました。アジアにはない穏やかな風景でした。6時間以上も乗ってグラスゴーに到着しました。グラスゴーは工業革命の発祥の地と聞きましたが、落ち葉が風に吹かれて舞い上がるような、ちょっと寂しいところでした。また、天気がいい日には若い人たちが、真っ昼間から公園でひなたぼっこをしていました。こうゆとりがあるのもうらやましいのですが、

アジアの活気に満ちているところを思うと、アジアが不況と言っても、まだまだいける気がしました。町には、ネットカフェが点在しています。バーガー屋のように清潔且お洒落で、とても繁盛していました。利用者は老若男女を問わずに利用していました。利用層の厚さには、国民の平均水準の高さを伺わせました。同じネットカフェでも、台湾のそれは裏産業的な要素を持つものに転落してしまったようです。ハードは液晶ディスプレイと最先端のもので、メーカーは **Fujitsu** や **Samsung** 等東洋のメーカーでした。ハード製造の重鎮がアジアか北米になっている現状では、パソコンの普及率はそれらに及ばないでしょうが、ネットカフェでの利用者を含めれば、実質的な普及率はもっと高いのではないかと思います。

学会はクロワッサンを半分土に埋めたような形のコンベンショナルホールで行われました。大変有名な建築物だそうです。国際学会ではありますが、意外なのはアメリカからの発表者が数名程度と極端に少ないことでありました。アジア人もさほど多くなく、世界的にとらえると欧州という地方の学会と感じさせられました。**3** 大国際学会は平均すると年 **2** 回の頻度で開催されます。発表したい学会は当然限られてくるので、発表するならアメリカの **IEEE** で発表するとの思考が働いているのでしょうか。聴講の合間は太陽電池製品などの商展に出かけました。私はその半年前には札幌で開催される **PVSC** に参加

しましたが、比べると商品が面白さに欠けていました。日本では、新商品への提案が活発でシースルー太陽電池や、フレキシブル太陽電池など様々なものが展示されていました。日本企業の商品創造力はやはり強い。それらの展示品は、学会の客寄せ効果もあるので、アジアの PVSC が外国の研究者にとって見逃せない学会となればしめたものです。今年 2001 年は韓国済州島で開催されますが、太陽電池学会をこれまでのような日本の独壇場ではなく、今後は台湾、韓国、中国の研究者もおおいに活躍して、盛り上げられればと思います。

3 日目になって私のプレゼンテーションが行われ

ました。発表者 1000 人のうち、1/4 がオーラル、その他がポスターで、僕は幸いにもオーラルでした。卒業間際のいいタイミングだったので、最後の OHP に大胆にもポスター希望のアナウンスをしました。ちょっと失笑を買いましたが、その後、早速フランスの研究機関に応募しないかとの打診を受けました。そこへの応募は後にあきらめました。東洋から来た私に機会を与えてくれたことには大変うれしく思いました。

最後に私事になりますが、私は 2001 年 5 月より、台湾工業技術研究院で太陽電池に関する研究の仕事に着くことになりました。

アメリカ赴任記

カ ソゲン
何 祖源

東京大学博士 (先端学際工学)

Lead Engineer, Ciena Corporation, USA

1998 年度奨学生

2001 年 2 月 1 日。熟睡から目覚めた。飛行機は太平洋の上で東に向かって飛んでいる。外は真っ暗。側に妊娠 7 ヶ月の妻が寝ている。もうすっかり疲れた。この一ヶ月間。昨夜も徹夜して家の最後の片付けをした。妻の寝ているうちに、引出しを開いて、中身を直接ごみ袋に入れる感じで。もう時間がないから。

イヤホンで軽い音楽を聴きながら、今までの経緯を振り返って思い出した。ストーリーのはじめは去年の 5 月。渥美財団の学会旅費助成金を頂いて、サンフランシスコで CLEO'2000 (Conference on Lasers and Electro-Optics) という国際会議へ出席し、講演した。年一度のトップレベルの学会で、また光電子工学の絶頂期でもあり、八千人ほども集まっていた。いろいろ面白い講演を聴き、この学界と産業界の様々な人々と会うことができた。学会の後、東海岸へ飛んで、二つ会社を見学し研究交流を行った。ボルチモア (Baltimore) の南にある、光ネットワークを専門するシエナ (Ciena) 社へ行く前、知り合いから「こ

の会社は大変人材不足なので、興味はないですか」という情報が入ってきていた。それで、履歴書も用意していたので、研究交流の後、面接した。最後に「いくら位、給料が欲しいですか?」と聞かれた。「えー」とびっくりして、「私はこのようなアメリカ式の面接は初めてですし、人材マーケットの状況もそれほど分かっていません。少し調査してから、Email で返事してもよろしいですか」と、何とか応えた。日本へ帰ってから、給料を交渉して、Offer Letter (採用合意書) をもらった。それから、会社に頼んで労働局や移民局とのいろいろな手続きをクリアし、やっと先月ワーキングビザが下りた。その後、大慌てで、東大の辞職の手続き、仕事の交代、資料の整理、旅行の準備、荷物の発送、住んでいた宿舍の片付け、友達との挨拶、そして送別会でのお酒と涙。送別会の風景を思い出して、胸の中はまた熱くなった。日本に来て 5 年半。指導教官と仕事上のボスの保立先生をはじめ、諸先生の皆さん、同窓と同僚の皆さん、ご支援を下さった諸奨学金財団の皆さん

ん、大変お世話になりました。先生、ありがとう。
日本、さようなら。

午後、ボルチモア空港に到着。手荷物を受けとってから、レンタカーのカウンターへ。日本で予約した車を運転してホテルへ向かう。週単位で借りられるホテルで、キッチンもついている。ここは我々の臨時家だ。

入社は月曜日の予定なので、その前の二、三日は時差ボケを直し、環境を認識するにはちょうどいい。二日目から、早速車に乗って回ってみた。妻がナビゲーターの役をしてくれた。まずはガソリンスタンドで大事な地図を買う。そして会社へ行く道を覚える。それから基本の食料品の買出し。それからアパート探し。高速道路と高速道路の繋がっていて、あちこちに飛んで行けた。以前何回もアメリカに来て、大都市の学会に参加したり、観光したりして、アメリカは車の社会、車がないと足がないという話は、前から知っていた。が、今回実際にここで生活してみたら、それは本当なことだと実感した。日本で運転免許を取っておいてよかった。そうでなかったら、アメリカに来て会社へ行くことも困難。

月曜日、入社。シエナ社は、次世代光通信ネットワーク設備の研究、開発と製造を専門とする新鋭会社。設立10年未満で、今は従業員も3500人を超え、NASDAQ 株式市場のスーパースターとも言われる。近年のアメリカ経済の減速に伴い、株価は最高値の四分の一弱になってしまった時期もあったが、ルーセント (Lucent)、ノーテル (Nortel) などビッグネームが十分の一になった状況に比べると、まだ元気な方だ。会社の第一印象は、まず外国人が多い。所属する部門は13人だが、アメリカ人はただ一人の秘書さん。部門マネジャーも外国籍の若者で、Ph.D.を取ってからこの会社に入り、たったの三年目だ。私は光電子専門の出身だからか、リーダエンジニアに命じられ、4人グループをリードする責任者を任された。他の三人中、一人は制御工学出身の博士で、プログラミングの専門家。一人は前物理学者。もう一人はテクニシャンさん。誰も私より年長で、入社も先だ。彼らをリードするというより、教えてもらう立場だ。もしかしたら、他の国に比べてアメリカの最も良いところはここにあるのではないだろうか・・・マーケットに必要な知識と能力を持ってい

れば、国籍、人種、年齢に関係なく、最適なポストを見つけることができる。

ただ、アメリカは、何でも良いわけでは決してない。むしろ他の国より、良いところと良くないところが鮮明に見える国だといえる。アパートを探すに、家賃が安いと言われるボルチモア市内に入って見た。建物も環境も汚くて、道路も凸凹。周りの雰囲気は怪しい。ボルチモア市では毎年銃撃で殺される人が380人を超えるというデータを思い出した。やめよう。お金の節約より、命と家族の安全が大事だから、郊外の住宅地で住む場所を決めた。家賃は丁度市内の二倍になった。ずっとレンタカーを借りるのは経済的でないので、三週目に車を買うことにした。どんな車を買おうか。周りの人を聞くと、みんなは日本車を薦めた。「なぜ？アメリカ車だと、同じグレードの日本車より数千ドルも安いですよ」。答えは、アメリカ車は力があるけど (Powerful)、信頼性がない (Unreliable)。結局、連年ベストセラー1位か2位のトヨタカムリに決めた。

「Powerful, but unreliable」。これは、車だけではなく、実はアメリカ社会のサービスや品質全体で、私が感じたことだ。アメリカで生活するのに絶対なくてはならない物の中で、最も大事な一つは社会安全番号 (social security number) という、一人に一生唯一与えられる番号だ。この番号がなければ、会社から給料がもらえない、銀行口座が作れない、クレジットカードが申請できない、健康保険に入れない、もし保証人がなければ、住居、電力、ガス、水道、電話などなど会社に契約することもほとんどできない。来てすぐに申請したが、こんな大事なことにトラブルが起こった。社会安全局に申請するとき、移民局に確認して、合わせて二週間程度くらいで郵便で届けると言われたが、なかなか来なかった。何回も行って或は電話で催促したが、「後二週」、また「後一週」の感じで伸びてしまった。それから「自分で移民局に聞いてみて」とまで言われた。仕方なくて、会社の人事担当と相談して、会社から当局と交渉してもらった。結局、申請してから約8週してから、大事な番号が手に入った。アメリカで生活にもう一つ大事なものはクレジットカード。Bank of Americaという世界有数の大銀行で申請した。「申請を許可し、カードをすぐ届ける」という知らせがすぐに来

たが、カードはどうしても来ない。電話で聞いたら、郵送時の住所にミスがあったようだ。そのため、そのカード番号を廃止し、新しいカードを発行してもらうことになった。それから、また何回かトラブルが起こった。最も可笑しいミスは、カード表面に持ちの主の写真とサインを載せるオプションがあるが、私はそのオプションを全然選択しなかったのに、届いてきたカードに西洋人の女性の写真とサインが写っていたこと。ほかに、アパートの契約、電話の契約など、簡単に済むはずの手続きはほとんどすぐ済むことがなく、どうしてもあちこちにミスがあったりして、交渉が催促することになった。「This is

America」という言葉を良く聞く。「この国の人は本当に自慢なんだな」と思っていた。でも、よく聞いたら、自慢の中に「しょうがない」という意味もあるのではないだろうか。

4月に、女の子が生まれた。私はずっと妻の側にいて、私の手で臍帯を切り、娘の誕生を迎えた。名前はMichelle、「神様からの贈り物」の意味だ。家では婷婷（ティンティン）ちゃんと呼ぶ。新しい世界で、新しい仕事、そして、新しい命の誕生。私にとってはもう一回ゼロからのスタートだ。がんばらなくちゃ。

オーストラリアのタウンズビルで開催された 第7回国際遺伝子水産学会参加報告

マリア ハケウ モウラ コインブラ
Maria Raquel Moura Coimbra

東京水産大学 博士（資源育成学）
ペナンブコ大学研究員（在ブラジル）

1999年度奨学生

国際遺伝子水産学会は3年ごとにシンポジウムを開催し、水生生物の遺伝子に関する研究の最新情報を交換しています。私は、2000年7月15日から22日まで、グレートバリアリーフを目の前に見渡す、オーストラリアの北東の町タウンズビルで開催されたこの会議に参加しました。今回、この学会は、遺伝子学の6つの分野（①Gene Expression, ②Transgenesis and Molecular Genetics, ③Application of Molecular Markers, ④Gene/Genome Mapping, ⑤Ploidy Manipulation, ⑥Breeding and Quantitative Genetics and Wild and Farmed Genetic Resources and their Interaction）から構成されていました。

この学会に初めて参加したのは、私が博士課程の2年だった1997年に、スコットランドで開催された時でしたが、最も興味深い研究発表はカナダ、

アメリカ、スペインの学者達によるものでした。しかし、オーストラリアの会議では、驚いたことに日本からたくさんの参加者があり、4つの賞のうち3つも日本の大学の学生が獲得しました。東京水産大学は2つ賞をいただき、しかも両方とも私の研究室でした（ひとつは私でした）。私の名前が呼ばれた時、本当に驚きました。最初、何か悪いことをしたのではとってしまったほどです。私はとても嬉しかったけど、混乱していたので、主催者と握手せずに、おじぎをして「どうもありがとうございます」と言っていました。マイクがなくて本当に良かったと思います。日本研究者の発表した論文が質・量ともに非常に充実したものであったので、私が日本で博士研究をしたのは正しい選択だったと再確認しました。

この会議は、同じ分野の研究者、特にラテン・ア

アメリカからの研究者と知り合う絶好の機会でした。南米出身の研究者全員が集まって、次回第八回遺伝子水産学会をチリで開催するための打ち合わせをしました。そして、次回の学会を南米に誘致するためのキャンペーンを始めました。たくさんの南米の学生がこの学会に参加したいと望んでいるけれど、距離的に遠いし、助成金も少ないので、なかなか実現できないと訴えました。学会の最終日（7月22日）に、チリのロベルト・ネイラ氏が行ったスピーチは、殆ど参加者全員の賛同を得、2003年はチリ開催が決定しました。これは、南米の水産学にとって非常に大きな前進だと思います。

ブラジルに帰国してから1年間、私は政府のさとうきびの研究プロジェクトに参加し、ペナンブコ州で最初の分子遺伝学とDNA連鎖の研究室を開設しました。最近、私は連邦政府のペナンブコ大学に採用され、ヒトの熱帯性疾患に応用する遺伝学的研究プロジェクトに参加しています。この研究プロジェ

クトは1990年初頭にJICAが支援していたLIKA (Laboratory of Immunopathology Keizo Asami).という研究室で行っています。現在、私は、Leishmaniosis という、まだ治療法が見つからない熱帯性疾患のゲノムのマッピングを行っています。

今は、魚ではない遺伝子の研究を行っていますが、これも同様に大変面白いです。近い将来、水産資源を含む動物の生産性を、分子生物学を使って改良する必要が増大するに違いありません。2週間前に水産物への遺伝子学利用についての会議が開催されましたが、今回はオーストラリアで会ったブラジル人研究者を集めて開催しようと計画しています。

この会議に参加させていただき、私が魚に夢中なのと同じくらい情熱的なたくさんの研究者達に会う機会を与えてくださった渥美財団に感謝申し上げます。

日本研究はもっと国際的な視野が必要である

こ けつ
胡 潔

お茶の水女子大学 博士(日本文学)
お茶の水女子大学人間文化研究科助手
1998年度奨学生

2000年の夏、「渥美国際交流財団の海外学習派遣プログラム」を利用して、カナダのモントリオールで開催されるアジア・北アフリカ研究の国際会議(ICANAS)2000の特別シンポジウム「JAPANIZATION(2)」に参加した。1997年にブダペストで開催されたICANASの「JAPANIZATION」特別シンポジウムがとても好評だったため、今回も「JAPANIZATION(2)」をやろうということになったそうだ。会議の期間は8月27日から9月2日まで約一週間だったが、この特別シンポジウムの他に、「エジプト研

究」、「イラン研究」、「イスラムとアラビア研究」、「インディアンとヒンディー研究」、「仏教研究」、「モンゴル研究」、「東南アジア研究」、「中央アジア研究」、「中国研究」、「韓国研究」、「仏教研究」など各分野があり、セクションごとに分かれ、アジア、北アフリカ研究領域での広い交流が行われた。

今回カナダへ行くことは、実は私にとって日本以外のはじめての外国旅行だった。仕事の関係でぎりぎり大会開催の日に着する便に乗ったが、アメリカのシカゴで乗り換えた時、次に乗るはずの便が運行中止となり、やむなく他の便に乗り換えた。結局

モントリオールに到着したのは夜の七時ごろで、学会が手配してくれたホテルに到着したのは8時ごろになり、一日目の会議とレセプションが終わり、会議参加者がみんなホテルに戻った時だった。しかし、嬉しいことに、このホテルはなんと中華街の隣だった。とりあえず苦手な洋食を食べずに済んだことにほっとした。もっと嬉しいことに、その時モントリオールで映画祭が行われており、映画が上映される大通りはこのホテルから歩いて五分ぐらいのところだった。到着の夜、時差の関係かどうか知らないが、とにかくちょっと興奮ぎみで、あまり寝る気もなかった。すぐ隣の大通りに出かけてみた。夜八時ごろなのに、大通りにはまだ多くの人が歩いていて、陽気な町だという印象を受けた。人人がベンチに座ったり、立ったりして映画を見ていた。人々の表情は明るくて穏やかだった。

翌日朝早く国際会議の開催されるモントリオールの会議センターに行った。すでに参加者の受付が始まっており、各国の参加者が続々と入ってきた。会議は各セクションごと分かれており、私の発表は29日なので、とにかく他のセクションを覗いてみたりした。そして29日に「JAPANIZATION(2)」という特別シンポジウムが朝から行われた。日本からの参加者がもっとも多かった。発表内容はいずれも日本文化と外来文化の関係に関するものだった。もっとも興味を引いたのは、最初に発表したカナダトロント大学のARNTZEN氏の発表で、『源氏物語』と白楽天の漢詩文の関係についてだった。男性的な表現が『源氏物語』においていかに女性的な表現になったかという主旨の発表だったが、

発表後も彼女と互いに意見交換できた。ARNTZEN氏が、最近日本研究の分野にアジアの若い研究者が増えている。それはとても嬉しいことだと言った。これまでの日本研究と言えば、アメリカヨーロッパ中心に行われ、日本に近い諸国においては、本格的な日本研究があまり行われてこなかった。これからはアジアの研究者がもっと努力し、アジアの視点から日本研究を行い、そして国際的な場を通じて欧米の研究者と盛んに交流し、国際的な視野から日本研究を行うべきだと思った。

学会からの帰り道、私はバンクーバーに寄った。UBC大学の日本研究センターをちょっと尋ねようと思ったからだ。この大学にアジア系の学生が多く、キャンパスも広く、活気があった。アジアセンターの建物の前には「真」「善」「美」とかいった漢字の刻んだ石が置かれ、建物の裏には日本風の庭園もあった。研究センターの図書館に入ると、日本関係の書籍が多く、図書館のスタッフに日本人の女性がいた。彼女は親切に図書館の検索の方法を教えてくれ、コピー機の設置された場所まで案内してくれた。将来機会があったら、もう一度ここを訪れて研究したいと思った。

「渥美国際交流財団の海外学習派遣プログラム」のおかげで、国際会議に参加することができ、多くのことを学んだ。今回の会議で、いろいろな見解が聞けて、交流ができたことに大きな喜びを感じている。これからもっと積極的にこのような国際会議に参加し、いろいろな見解に耳を傾けながら自分の研究をやっていきたいと考えている。

国際比較研究方法とグローバル研究方法を考える アメリカの旅より

がお りんな
高 玲娜

一橋大学 博士(社会学)

上海大学講師

1995年度奨学生

私は一橋大学で十年近くも勉強した結果、2000年7月に社会学博士号を取得した。しかし、私はそれ

でも満足できず、新たな研究の道を切り開こうと思いい、アメリカの大学での調査研究をしたいという宿

願が浮上した。借金を抱える私は幸いに渥美財団から補助金を頂き、早速ボストンにあるハーバード大学に行ってきた。その時、私の知り合いである王先生がこの大学で世界の転換期における犯罪の国際比較の共同研究に参加されていた。そこで、王先生は喜んで先ずハーバード大学を案内して下さった。私は大学の図書館や教授のオフィスや美術館などを見学した。

学問には国境がないように、この大学にはキャンパスを囲む塀がない。広大な敷地に数多くの教育、研究施設があるにもかかわらず、研究室が不足しているらしい。この原因は世界各国から来ている学者や学生が大勢居るからだという。そこでは世界の一流の頭脳が集結し、異なる国から来た学者が国際比較の共同研究を行う適切な環境が備えられている。

王先生によると、東西冷戦が終了した後、旧ソ連から分裂した各国、東ヨーロッパ諸国、中国、日本及びアジアなど主要国においては、公務員の賄賂、一般社会の経済、刑事犯罪及び国際組織犯罪が増えているということである。この国際比較研究は上述した各国における犯罪率と処罰方法を調査研究の対象にした。各国での犯罪率の測定方法が異なるので、まずその測定方法を統一しなければならない。その上に各国での犯罪率を測定し、犯罪の発生状況を把握する。そして、各国における犯罪に対する処罰方法の異同を考察する。

私の専門研究は社会犯罪ではなく、企業の人事労務管理、労使関係、労働問題などである。かつて、社会主義国と資本主義国における労使関係は大きく相違していた。また、同じ資本主義の国々においても、労使関係の特徴はそれぞれ違う。従って、労使関係の研究者は国際比較研究方法を踏まえる必要があると思う。

東西冷戦が終結した後、先進資本主義の資本や経営のノウハウが社会主義の発展途上国に流れていくことになっている。グローバル経済現象が起きているので、労使関係の研究分野でのグローバル研究という言葉も時に耳にする。

私がアメリカから日本に戻った後の9月に、オーストラリアのある教授は日本社会政策学会労働史分

会の研究会において、"Towards a Global Labor History: Workers' Movements in the Argentina Australia, Japan and the United States from 1912 to 1952" という題目で、講演を行った。

教授は序説において、次のような話から講演を始めた。The term "globalization" is everywhere there day — in the news, as a driving force for business, as a main topic of interest to academics ,and a social issue that has recently generated protests in many parts of the world. For the most part, "globalization" has been associated with business and free market ideology, and it is generally viewed as a very recent phenomenon. "Globalization", however, is neither recent nor confined to the sphere of multinational business activity.

As both an historian and former trade union activist, I seek to challenge this popular conception of globalization.

講演が終わった後、私はグローバル研究方法と国際比較研究方法の最大の違いは何かという質問をした。教授は国際比較方法は異なる国における共通な研究対象の異同点を比較する方法であると説明した。一方、私はグローバル研究方法についての教授の説明をはっきりと理解することができなかった。

アメリカの旅から得た実感の一つを言うと、異文化を持つ多人種や多民族がアメリカという一つの国に共存し、それぞれの文化における相対的な独立性を保ちながら、アメリカという総合的な文化を創出しているのである。アメリカの労使関係の分野において、人種や民族に関係なく、共通した労働関係の法律や規定が厳密に定められているようである。しかし、労働雇用の実態を見ると、異なる文化、人種、民族などの要素が働くことが感じられる。また、厳密な学術的な見解ではないが、アメリカという一つの国の中でも、"Globalization" の様相が見られるのではないかと思う。しかし、私には"Globalization" という概念の内包と外延がまだはっきり定められていないという気がする。

若手研究者としての私は、これから先輩や先生に学びながら、研究成果を挙げるため、よい研究方法を磨いていかなければならないと考えている。

IT革命と「フュージョン」

キム ウンヒ
金 雄熙

筑波大学 博士(国際政治)

韓国仁河大学国際通商学部専任講師

1996年度奨学生

2001年1月から2月にかけて渥美国際交流奨学財団の学会派遣プログラムを利用し、日本とアメリカを見てまわる貴重な機会を持つことができた。米西部訪問を含めると3週間に及ぶ長い日程は留学当時は考えることもできなかつたことである。日頃の関心事の一つである日本の情報化や情報化一般について最近の動向と日本の苦悩を聞くことができた。

東京ではシンポジウムへの参加、専門家インタビューなどいろんなことをしたが、とりわけ今西さんが参加を斡旋してくれた世界平和研究所主催の「IT革命と日本の対応」シンポジウムと船橋洋一さん(朝日新聞社コラムニスト)とのインタビューが印象的だった。もちろん、久しぶりに味わったパチンコでの勝利も記憶に残っている。

シンポジウムでは、最近日米の情報化格差が広がっており、特定の分野においては一部アジア国家にも遅れをとっているとの懸念が出された。その特定の分野とは情報通信基盤に関わるものである。確かにパソコン+ブロードバンド・インターネット型のモデルにおいて日本の出遅れは著しい。もちろん、発表者やフロアから日本の強い部分と技術的な潜在力を考えた場合、アジア国家との対比はそれほど意味を持たないのではないかと意見もあった。

若干の意見はあったものの、グローバルなIT革命に対応できる日本のモデルとは携帯電話を中心に据えたインターネット(ビジネス)モデルで米国や米国を追随している韓国のモデルとは異なるという意見が支配的であった。このようなモデルが伝統的に日本が強い家電と結びつく場合、21世型の国家発展につながるであろう。

いずれにしても、私はこれまで各種のシンポジウムに参加したが、韓国が引き合いに出され、韓国に遅れていることへの懸念を聞いたことがない。それだけにシンポジウムは新鮮な衝撃を与えた。船橋さん

とのインタビューでは携帯やパソコンなどインターネット・アクセス・デバイスよりデジタル格差の解消こそが重要であるとの認識を共有した。

この問題を掘り下げて考えるには船橋さんも我々も時間的余裕をもたなかつた。米西部での機関訪問およびセミナーが待っているからであった。総走行距離が1マイルにもみたくない新品のレンタカーに乗り、西部の名門大学のUCLA、USC、UCバークレー、スタンフォード大学などをまわり、各大学の地域研究センターで日本関連の資料収集にあたった。

とくに印象に残ったのはバークレーでの非公式円卓会議であるが、その会議では日本や韓国で携帯の普及が進んでいることについても議論が行われた。小集団志向が強い日本や韓国など(small group society)では、携帯電話と携帯によるインターネット利用が普及している。これに対し、アメリカの場合は人と人の距離が相対的に離れており、日常生活で携帯が必要となる場面が少ないのではないかという意見が強かった。言い換えれば、日本が想定しているIT分野での日本独自のモデルとは文化の違いや奇形な発展に端を発するものであり、米国から見た場合自然な現象ではないという見方である。

しかし、このような見方について徹底した議論を行うには惜しくも語学の面で限界が明確であった。旅行中の食事で言語上のハンディキャップが働いたのは言うまでもなく、簡単に注文できる場所を選んだ。恥ずかしくも、食事のほとんどは、日本留学中に愛用し、韓国でも馴染みのあるマクドナルドのビッグ・マックであった。

サンフランシスコではシリコン・ヴァレーを訪問する計画であったが、3週間以上続く海外旅行のせいか結局体調を崩してしまった。訪問予定をキャンセルし、代わりに近くの別の「ヴァレー」に行くことにした。同じ「ヴァレー」だから大丈夫じゃない

かと自分を慰めながら。選んだところはナパ・ヴァレー (Napa Valley) でカリフォルニアのぶどう酒産地で有名なところ。豊かな自然の中で味わったぶどう酒はこれから相当の間忘れられないであろう。一行はお土産にぶどう酒を何本か買って、17 マイルズ・ドライブ (17miles drive) を楽しみながら米西部のミニ縦断を終えた。

米西部では、コリアン・タウン、リトル東京などを訪問したが、おどろくべき事実はジャパン・タウンにある店の持ち主の多くが韓国系であることであった。ロスで立ち寄った飲み屋やサンフランシスコ

のジャパン・タウンにあるホテルもそうであった。ホテル名に「みやこ」が入っていることから、日系人が経営し、宿泊客の中には日本人がおおいだろうと予想したが、見事に外れてしまった。時間と経費の制約でその逆の現象を確認することはできなかったが、第3国でも日韓の「フュージョン (fusion)」が行われていることに一応の喜びを感じた。

このような「フュージョン」が日韓関係の多方面に渡ってバランスよく起こることを祈りながら、また、改めていい機会を与えてくださった渥美財団に感謝の意を表しながら、派遣報告を終わりにしたい。

もう一つの歴史認識

り おんみん
李 恩民

一橋大学 博士 (社会学)
宇都宮大学国際学部外国人教師
1997年度奨学生

2001年3月22~25日、アジア研究学会第53回年会 (The 53rd Annual Meeting of the Association for Asian Studies) が、米国シカゴで開催された。私は渥美国際交流奨学財団の海外派遣助成を受けて同会議の「日本占領下の中国: 1937~1945」というラウンドテーブル・ディスカッションに出席し、熱烈な議論に参加した。

このラウンドテーブル・ディスカッションの報告者は日本・中国・台湾・アメリカ・イギリス等地域からきたフィールドワークをしている専門家である。報告の内容は汪精衛傀儡政権・占領軍への協力など多岐にわたるが、都留文科大学笠原十九司教授の報告が注目を浴び一つの議論の中心となった。氏は1990年以来、自ら行ってきた華北農村調査 (私もメンバーの一人) をもとに「華北農村と日本軍の三光作戦」について講演し、私の出身地である山西省における旧日本軍性暴力の実態と現在の裁判状況についても紹介した。

「三光作戦」というのはもともと中国側が名づけたもので、旧日本軍が1940年代初頭において主と

して華北地域で展開した中国共産党の根拠地に対する「燼滅掃蕩」作戦のことを意味する。「光」という字はすっかり無くすという意味があり、「三光」とは殺光 (殺しつくす)、搶光 (奪いつくす)、焼光 (焼きつくす) の三つを指している。同作戦は抗日根拠地の覆滅が目的で、根拠地の一般民衆そのものが対象となっている極めて残酷な作戦であった。

山西省における戦場性暴力に関しては、現在東京地裁で二つの裁判が行なわれている。1996年2月に2人の原告によって提訴された「中国人『慰安婦』損害賠償請求事件」(第二次訴訟) 及び1998年10月に万愛花等10人の原告によって提訴された「中国・山西省性暴力被害者損害賠償等請求事件」である。いずれも山西省孟県の西部に設定された前線拠点に「警備」配置された旧日本軍、具体的には北支那方面軍第一軍独立混成第四旅団独立歩兵第14大隊所属の部隊が、1940年末から1944年初めに引起した性暴力の被害に関わる裁判である。笠原氏はボランティアとして後者の裁判支援グループに入り、独自の調査と研究活動をされている。

報告の後、すぐ活発な議論が展開された。議論は

人間性と戦争 (human nature and war)、すなわち戦時中、日本では良い息子なり良い夫なり良い父親なりの人々がいったん徴兵され兵隊となった後、なぜ平気で女性を侮辱し無差別的に庶民を殺すことができるのかに集中する。私はそれが当時の日本軍部の人命軽視思想にあるのではないかと指摘した。交戦中の軍隊は通常、帰休制度を持ち、ローテーションを組んで戦うが、旧日本軍の兵士は消耗品扱いで、一度出征すれば戦死か終戦まで戦われなければならなかった。戦時、彼らは突撃作戦・特攻作戦・捕虜になるより自決せよ(1941年の戦陣訓「生きて虜囚の辱めを受けず死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」)等を強要され、「死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ」(軍人勅諭)と教育された。こうした旧日本軍の兵隊は、交戦国の人はおろか自分自身の命さえ尊重していなかった。そこで「どうせ戦争で死ぬのだから」という死の影に脅かされる兵隊は、「女性を知れば一人前」「女性を知ったから男として悔いなし」といった言葉に表れるように、女性への暴行によってストレス解消を図り、殺戮の行動に及んだのである。

議論の最中に「なぜ中国も日本も過去に固執するのか」という米学者の質問から、私は一つのことを気が付いた。日本の中国侵略が事実あったかどうかということは、第二次大戦後 50 年以上が経過した今、世界においては学問的には既に決着がついた。ところが、当事国の日本においても中国においても歴史学研究成果が国民の記憶として共有されておらず、それをめぐって日本人と中国人の記憶は未だ大きな乖離がある、ということである。

最近の数年間、日本の一般社会においては、過去の戦争を正当化する議論がテレビ・映画・雑誌・書籍などマスメディアを通じて圧倒的な量で流れている。これに対して中国側はいつも過剰的に反応し「歴史認識問題」を対日外交の一要素としている。歴史を重視すぎる中国と日本は、如何にして歴史問題で国家間の関係をギクシャクすることを避けられるだろうか。寛容心をもって過去より現在を重視する視点が重要ではないか、と私は考えている。

歴史とは過去のことではなく現在と未来の問題であるとよく言われている。したがって、中日両国の明るい未来を開くためには歴史に対する正しい認識が必要だ。しかし、ここに言う歴史とは、現在のマ

スコミに限定されている中日戦争期の歴史(1931～45年の15年戦争或いは1937～45年の8年戦争)だけではない。2千年にわたる文化交流の歴史もあれば、戦後の民間交流の歴史(27年間)、とりわけ1972年国交正常化以来経済協力の歴史(29年間)もある。戦後に限ってみても中日間の友好と協力の歴史は敵対と戦争の歴史より長くなっているということが、今日の歴史認識の起点であるべきだ。われわれはこの歴史を大切にしなければならない。

人間は物事を考える時に「現在」という立場を離れることはできない。われわれが社会なり文化を歴史的・流動的に考えるのは、基本的視点が「現在」にあるから、そこに原点を置いて過去を探究し変革的な未来像を作るわけである。その意味で言えば、中日両国の現状をどう見、どう評価し合うかということは、今後の信頼関係の構築の上で歴史認識より極めて重要な意義を有している。最近の数年間、日本においては、中国の改革開放に伴う経済発展・国力増強をアジアへの脅威と見る傾向が強くなってきている。一方、中国においては、歴史事実を無視して皇国史観を称賛したり過去の侵略戦争を否定したりといった右翼団体の活動を過大視し、それを理論的に過去の軍国主義の日本とつなげる傾向が見られる。これはお互い現状認識不足によって生じたもので21世紀の長期的協力関係を築く最大の障害となっていると断言せざるをえない。中日両国のどちらにとっても歴史問題を現在の外交に対する牽制の材料として利用すべきではないというのが、私の素直な感想である。

現在の立場に立って現状を認識した上で歴史を語るときに政治的な意図をもつと、歴史の記憶は単に感情的な記憶になってしまい、真の歴史は安易に翻弄されてしまう。自国への「誇り」を植えつけるための歴史教育や、求心力を求めるための愛国主義的歴史教育のいずれも、現在の国際化の潮流に反する逆流である。今、経済・資源・環境のグローバル化が急速に進行し、平和・民主・発展と国際友好が求められるなか、国家主義的な発想こそが危険な存在であると言えよう。

前述の会議の終了後、私は首都のワシントンに行き、私の最も尊敬する政治家であるリンカーンの記念堂を見学した。その時、記念堂の斜め前の両側

にある兵士の彫刻が目にとまった。左側にあるのはベトナム戦没者慰霊碑（**Vietnam Veterans Memorial**）である。黒い御影石の壁にベトナム戦争で亡くなったり行方不明になった**5万8192**人の名前が刻まれている。いくつかの名前の前には花が飾られ、慰霊碑の近くには名簿が置かれ、どの位置に誰の名前が刻まれているか記されている。右側にあるのは朝鮮戦争戦没者慰霊碑（**Korean War Veterans Memorial**）である。同じ黒い御影石の壁に“**Freedom is not Free**”が刻まれている。百名近く社会学習のために来た中高学生達はその前に花輪を捧げた後、「負傷者（米国**103,284**人、国連**1,064,453**人）、捕虜（米国**7,140**人、国連**92,970**人）、行方不明者（米国**8,177**人、国連**470,267**人）、死亡者（米国**54,246**人、国連**628,833**人）といった数字を丁寧にノートに書いている。その姿は時々浮かび上がってくる。学校で彼らはどのように教えられたらろう？この数字から何を読み取ったのか？自由の貴重さだろうか？それとも命の尊さだろうか？ちなみに、去年**6**月、米国防省は当時の担当部局が同期間に世界各地で病気や事故で死亡した米兵**17,730**人を間違って朝鮮戦争の死者数に加えていたことが判明した。そのため、朝鮮戦争の死者数を下方修正したが、慰霊碑は以前のままとされている。ベトナム戦争と朝鮮戦争の性質については、当事国政府の評価は明らかに異なっているが、戦場で血を

流した庶民の子弟に対する同情心は同じだと思う。

ドイツで歴史は書き方の分類の上で「教訓的」とか「実用的」とか言われている。われわれが不幸な過去を記憶する意味は**21**世紀の地球社会において**20**世紀の戦争と戦争犯罪をどう克服していくかを追及し、良き地球市民になることにある。目的がこれであれば、同じ事件への認識の多様性を容認・理解することが重要である。言い換えれば、歴史認識の寛容心と思いやりを持つことが重要だと私は思う。こうしてこそ、もはや中国人や日本人だけに属す歴史、すなわち自国史ではなく、われわれとその他の国家・民族が共有する地球社会の歴史を作ることができるかもしれない。

こうした感想を持って私は4月初めにダラス空港から成田空港へ向かった。ところが、日本に着くと「新しい」歴史教科書をつくる会が編纂した中学校社会科教科書は文部科学省の検定で合格とされたことや、これに対して中国政府が日本政府の対応を厳しく批判している等のニュースが伝えられている。中日両国はこの問題を解決するのに国益とプライドだけに固執せず、将来に向けて現実に立脚した「長期的解決法」を探るべきだ。これとともにアジア・太平洋地域の融和関係を維持するという観点で歴史認識についての歩み寄る努力をするべきである。その結果、国家・民族間の歴史認識のトラブルについての健全な国際的解決方式が生まれるかもしれない。